

Q10



シカ資源を中山間地の地域づくりに活かすにはどうすればよいのでしょうか？

A

日本では変化に富む地勢の中に稲作文化が山の奥地にまで息づき、人々の労苦が刻まれた棚田や景観豊かな山里が全国に存在し、こうした山里には多様な生物が生息しています。そのなかでもニホンシカは貴重な日本在来の生物資源の一つであり、古代から森林環境と共存し、「日本人の心・技・匠」を象徴し、体現してきた歴史をもつ貴重な資源です。在来種であるニホンシカが安心して定住できる自然環境（生態系）の保全に努めながら、馴化と飼育の技術を駆使して観光牧場を立ち上げ、疾病予防や繁殖（育種）に取り組みながらシカ資源利用を持続できるような取り組みが期待されます。

日本の養鹿場の実践から考える

現在、国内に養鹿場はほとんどありませんが、それを理由に養鹿は国内では不可能だと決めつけることなく、シカ資源の価値についてもっと思いを巡らすことが重要ではないでしょうか。とくに、昭和60（1985）～平成12（2000）年頃にかけては中山間地域を中心に国内で66ヶ所あまりの牧場が存在した時代もあったことから、その道を拓き、養鹿産業の基礎づくりに取り組んできた先駆者たちの「志」や「技術」に学び、その「遺産」をしっかりと次代に継承・発展させていくことが必要です。

シカと共存し、その資源を有効に活用し、中山間地域を軸にシカをテーマにした新しい産業を興し、それを起爆剤に地域を活性化していくことも可能

だと考えます。とくに今後新たな展開を図っていく上でのポイントとしては、これまで述べてきた鹿肉の健康増進等につながる薬膳的な利用とともに、30年間にわたる日中の養鹿技術交流のなかで共同研究により製品化してきた幼角製品（鹿幼角酒など）を復活すること。また、シカ革を使った伝統工芸品である「印伝」（現在、原料はほとんど中国産キョンの原皮）などに日本のシカ革を利用していくこと、この2つを突破口として養鹿の再興に向けた道筋にもつなげていけるものと考えます。

養鹿に取り組んできた地域の一つ、福島県東和町（現・二本松市）では、少子高齢化対策の一つとして養鹿場の開設と日中間での養鹿技術の交流、幼角（鹿茸）の民間薬としての製品化（鹿幼角酒「気快」）の3つの事業を日本で最初に推進し、多くの成果を挙げてきました（表9参照）。しかし、その事業は全国の養鹿場と同様に道半ばの状態でもBSE発生により、やむなく撤退を余儀なくされてしまいました。そうとは言え、養鹿場の灯は何とか絶やさないでいたいものです。

表11 地域の文化資源を活かした地域産業おこしとして取り組んできた東西の優良事例

	[東日本] 福島県東和町（現・二本松市） 東和鹿場	[西日本] 熊本県山鹿町（現・山鹿市） 山鹿鹿牧場
歴史・文化資源	安達郡木幡村（現二本松市）は綿羊と養蚕が日本一だった	古い遺跡からシカ肉をさばいたと思われる刀が発掘される。日本一「鹿」に関わる名称が多い
開始と概要	昭和61（1986）年台湾からダマシカ導入	昭和61（1986）年ニホンシカのほか10品種導入
事業目的	幼角製品化による地域おこしに取り組み、過疎地の人口流出対策とする	シカ肉や幼角製品を開発し、観光・福祉連携をすすめる
主体	住民有志が主役で、自治体が支援し、シカの団体と連携	個人が主役で、農業高校と連携
中国との技術交流	服部健一町長（当時）以下20余名が数次にわたり交流。中国特産研究所のシカ牧場などを視察のほか、来日した技術者とも交流を行う	仲光敬吾、中尾正弘、原賀正人、石渕和人、前田律、仲光満津子、松原各氏7名が中国農学会やシカ牧場などを訪問し、技術交流を行う
事業の推移	平成13（2001）年BSE発生により事業撤退	平成13（2001）年BSE発生により事業撤退



福島県東和町（現・二本松市）の養鹿場



熊本県山鹿町（現・山鹿市）の養鹿場



シカ資源を活かした 地域産業立ち上げに必要なこと

シカ資源を活かして観光事業を立ち上げるにあたって、前提としてどのようなシカ対策が必要となるでしょうか。

まずは、移動シカとなって各地に被害を与えているシカの群れを定住シカとして本来生息すべき領域に回帰させることです。その一方で、野生シカを誘引・馴化し、その上で養鹿をベースにした観光牧場などの新たな仕事づくりを行うことです。その際に、林業と畜産業（酪農家、獣医など）が連携して取り組むとともに、そうした人材も含めて地域に眠るさまざまな資源を掘り起こし、相互に結びつけていきましょう。それらが有機的につながり合うことにより、新たな地域の産業が創出される大きな力になるに違いありません。

その際に留意すべき視点として以下の3点が重要です。

1. 森とシカとの密接な関係性を考慮し、傾斜ある草原や荒地の利用など、山間地の地形や地域資源を利用して営まれる「山地酪農」の実践に学び、過疎・僻地でのシカの養牧のスタイルを築くこと
2. 特用家畜として野生シカを馴化し、人工的に飼育する技術を確立する。餌として地域に豊富に存在する山林の小枝や葉っぱなどの植物資源を最大限利用し、地域資源を生かした飼料の開発・生産を行うこと
3. 特用家畜のシカの全身利用を目指して、①皮革 ②肉・角 ③骨の三品セットで事業化を図ること

図17 シカ牧場の配置図（長野県・大鹿養鹿生産組合南アルプス鹿牧場の例）



Point

野生シカを誘引・馴化した養鹿の取り組みを全国の中山間地に広げ、特用家畜としてのシカの本格的な飼育（畜産的飼育）と並行して推進していくならば、中山間地域での新たな仕事づくりにつながり、人口流出を食い止める一助にもなるのではないのでしょうか。